

鴛泊小學校職員會編

鴛泊村鄉土讀本

發行所 鴛泊尋常高等小學校

工本

鴛泊村郷土讀本

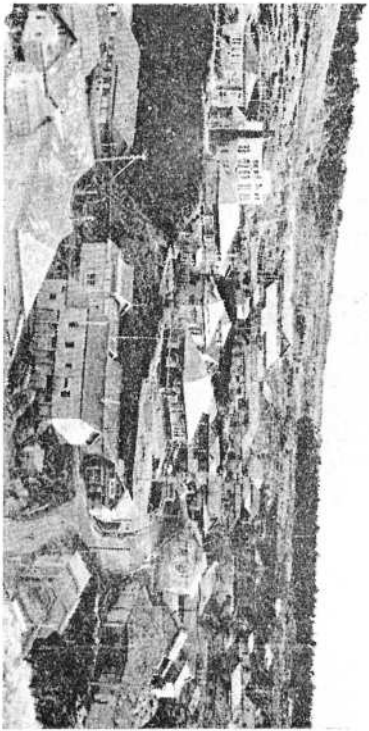
目次

一、沿革	一
二、位置・面積・人口・地勢	五
三、氣候	九
四、産業	一三
五、役所	一九
六、教育	二二

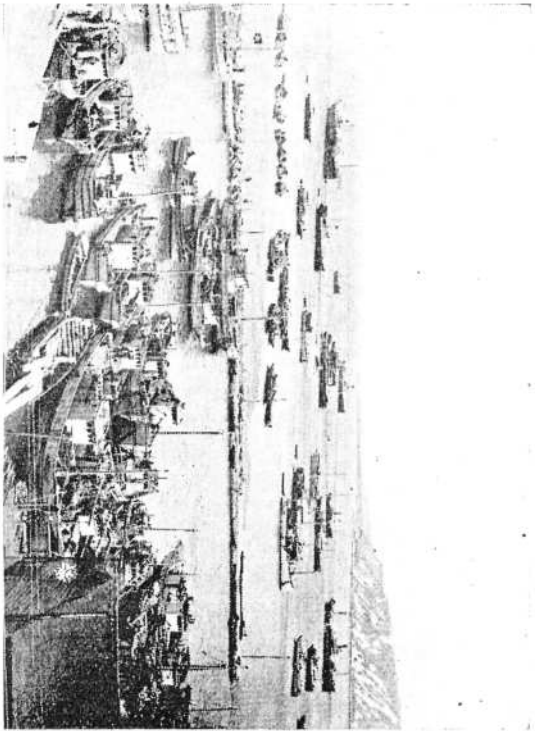
七、社寺	二五
八、交通	二九
九、地名	三三
一〇、地名	三八
一一、私達の覺悟	四一

附 鴛泊村地勢圖

5



景全街市泊駕



港泊駕るけ於此期漁盛

總發行所 上海

上海

上海

上海

上海

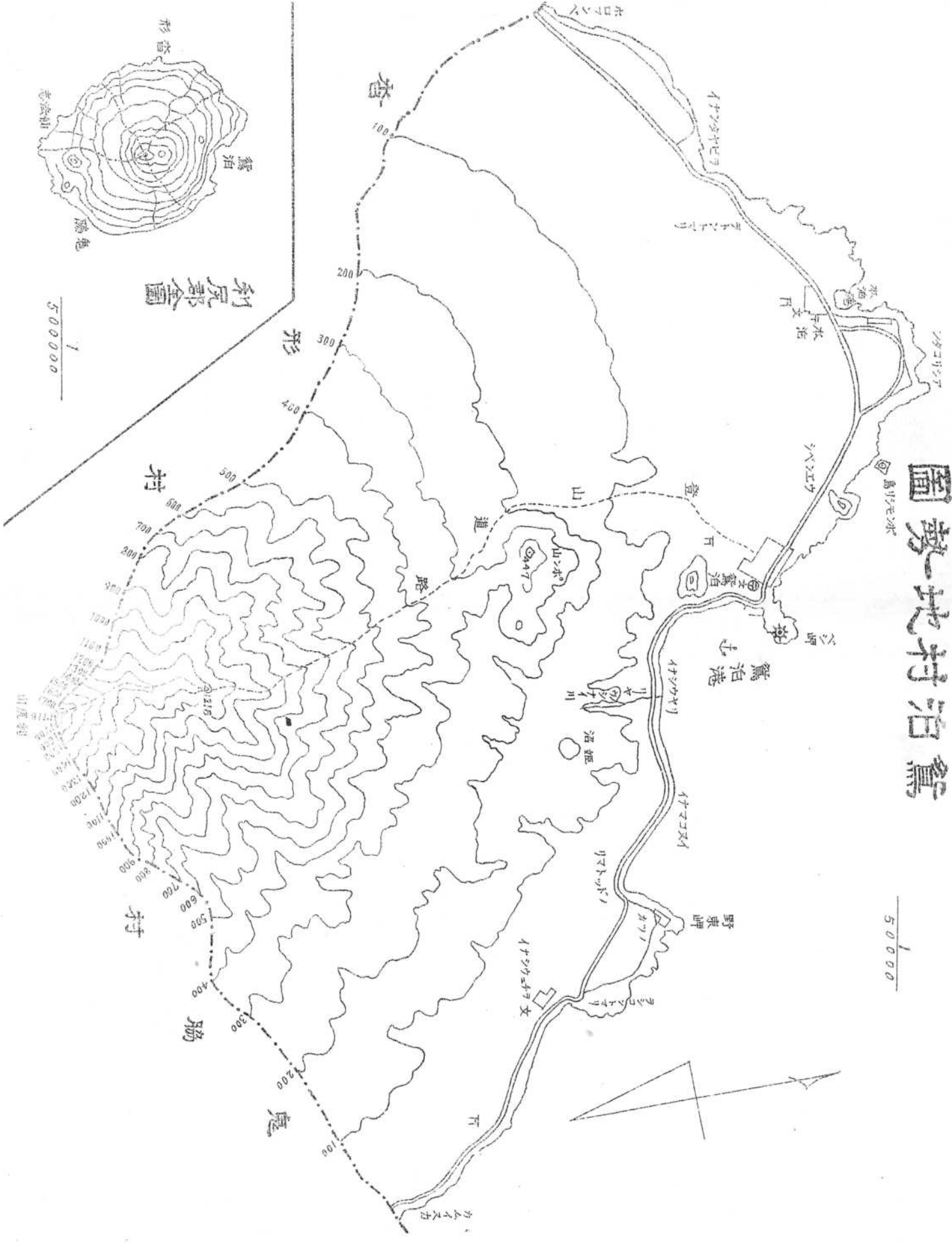
上海

上海

上海

鷺沼村地勢圖

50000



鴛泊村郷土讀本

一、沿革

海上に立派な高い山の聳えてゐる島を、蝦夷地のアイヌ人はリイシリ(高島)と呼んで、常に美しい姿を眺めて居たが、其の中に獨木舟に乗つて渡る者があつた。熊や蛇の様な嫌な動物は居ないし、魚類は非常に豊富で、而も氣候が大變良かつたので、其の儘此の島に住む様になり、其の後も海を渡つて來るアイヌ人が次第に多くなつた。これは今から數百年昔の事で、最初に住んでゐた所はリヤウシナイ(キヤウシナイ)であつたとの事である。そしてこれ等のアイヌ人は岩窟や~~野~~を家として魚を捕つて暮ら

してゐたのである。今も時々其の頃使つたと思はれる石器類が方々から見出される。

和人は昔から航海術に長けて居たので、蝦夷地へも時々往来し、其の中には時化の爲漂着して歸るに途なく、本島に住む様になつた人もあらう。これ等の人々が和人として本島に來た最初の人々であらう。

豊臣秀吉の頃、松前氏が蝦夷地(北海)の領主となつたので、本島も其の一部となり、更に徳川時代になつてから和人も來て漁業を營む様になつた。然し此の頃は春に來て鯨や昆布の漁をして、秋の初めには内地に歸つたのである。本泊に在る利尻權現社の奥ノ院は、今から百七十年程前(三)に建てられた御社である。

其の頃利尻漁場と稱して、岡田八十次、藤野四郎兵衛等

の人々が、松前藩の漁場請負人となり、鯨漁業の開発を計つた。

當時北方からロシア人が次第に侵略して來て、文化四年には千島樺太を侵し、更に禮文利尻を侵した。そして本泊に碇泊して居た我が商船や官船を焼き、上陸して會所人家・倉庫等を焼き拂つてしまつた。それで急に幕府は北方警備の大切な事を覺り、會津・仙臺・南部・秋田・津輕の五藩に北門の警備を命じた。その中利尻は會津藩士百六十名を以て警備させた。此の一隊は本泊に本陣を置き鴛泊と省形とに陣を置いて守つたので、流石のロシア人も我が武威に恐れて再び來なかつたが、病死する者五十餘名の多きに上つた。其の御墓が本泊に三基、鴛泊に三基、タネトシナイに二基あつて、毎年招魂祭には村民先づ此

の御墓に参拜して、往時國家の爲に斃れた忠魂を弔つて
ゐる。

明治の初、北海道を十一箇國八十六郡に分けて治めた
が、其の時本島を利尻郡と言ふ様になつた。

明治九年に、鴛泊に總代人と言ふ役（第一代人村市蔵）を置いて
利尻各村（總泊、本泊、鬼脇、石崎）を治めた。これが利尻に於ける村事

務の初めである。明治十三年に、利尻各村戸長役場に變
り、大村千盛と言ふ人が第一代の戸長に命ぜられた。明

治十七年に、鬼脇に戸長役場が移されたが、明治二十五
年には、再びヲシトマリに鴛泊外二ヶ村（本泊、香形）戸長役場を置

いて治めた。その時の戸長は能條伊之吉と言ふ人である。
此の頃の鴛泊市街は、戸數も少く道路も悪く淋しい部

落で、ヲシトマリとノボリマナイとは離れた部落であつ

た。學校は今の役場の所にあつて、小さな校舎であつた。
鯨や昆布の漁業は大變盛んで、雄忠志内の端からポロツ
ソベの端まで大きな漁場が澤山あつた。明治三十五年四
月二級町村制が施行せられて、林田則友と言ふ人が第一
代の村長になつた。大正十二年四月から一級町村制が施
行せられて今日に至つたのである。

二、位置・地勢・面積・人口

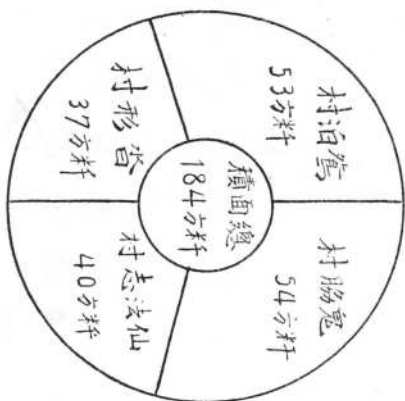
鴛泊村は、利尻島の北部に位し（東經百四十二度十四分
北緯四十五度五分）東南は鬼
脇村、西南は香形村に境し、背後（西）には一七一八米の利
尻山屹然として聳え、前面（北）に日本海の大平原を控え、
海上四哩を距て、禮文島と相對してゐる。又東方二十哩

を距て、天鹽北見の沿岸を遠望し得て、風光が極めて明
眉である。

面積は五十三方^里（五）で、利尻山の裾野である平原は
緩傾斜をなして海岸に至り概ね段丘状を成してゐる。此
の平原は村の中央部から西部にかけて廣く東部方面は甚
だ狭い。利尻山の中腹から山麓にかけて針濶混交林であ
るが、西部の廣い平野は一面に
草原である。

利尻島は利尻山の噴火によつ
て出来た火山島で、島全体が堅
い安山岩で、其の上が火山灰や
腐植土で被はれて居るから、平
原にもこれ等の岩石が現はれて

利尻島の面積



居る所が多い。殊に海岸は皆岩石である。海は岸からす
ぐ深くなつてゐる。

海岸線は約十六^里（四）で略々中央にベシ岬が突出して鴛
泊灣を抱き、東方の野東岬と相對してゐる。西方にはポ
ンモシリ島アシリコタン岬等がある。

鴛泊港と本泊港とは天然の良港で、昔から北方航海に
は大變大切な港であつた。近年築港が完成したので、本
泊港は漁業の根據地として知られ、鴛泊港は漁業の根據
地たると共に交通上の要地として何れも大いに利用され
るやうになつた。

利尻島の河川は何れも其の源を利尻山に發し、本島特
有の空河が多い。本村で常に水の流れてゐるのは、ノボ
リアナイ川日沼川リヤウシナイ川發電所川等で、何れも

気 候
 人 口
 雄 志 内
 リヤウシナイ
 鶴 泊 村 四 六 四 一 人
 香 形 村 四 八 四 三 人
 鬼 島 村 三 九 一 九 人
 仙 法 志 村 三 〇 四 一 人
 (昭 和 十 年 國 勢 調 査)

利尻島は、北海道の北端の海中にある一孤島であつて我が鴛泊村は、其の北部に位置を占めて居るので、大變寒さの嚴しい所の様に思はれるが、實際は、北海道の陸

三、氣 候

リヤウシナイは、利尻島の中で、一番早くから人の住んだ所で、昔は病院や寺院等もあつたが、今は只漁師ばかりの部落である。雄志内には、學校や病院もあつて、東部の中心をなしてゐる。

本村の人口は、約四千六百人(男約三千四百人、女約三千二百人)一方軒平均約八十五人餘になり、總戸數は、約七百六十戸である

本 部
 鴛 泊
 落

小川ばかりである。海岸線に沿ひ狭長なる平地に漁家點在し、船着の良い所に集團部落がある。

鴛泊市街は村の中央にあつて、戸數二百七十村役場學校警察郵便局其の他の諸官衙神社寺院病院等があり、又商店會社等軒を並べて建ち、政治教育金融交通の中心地をなして居る。殊に最近は上水道も完成して、飲料水火防等に頗る便利になつた。鴛泊の東方にはリヤウシナイ野東チシコントマリ雄志内カムイトマリ等の部落があり、又西方にはアシリコタン本泊オトントマリオビヤタシナイホロフンベ等の諸部落がある。

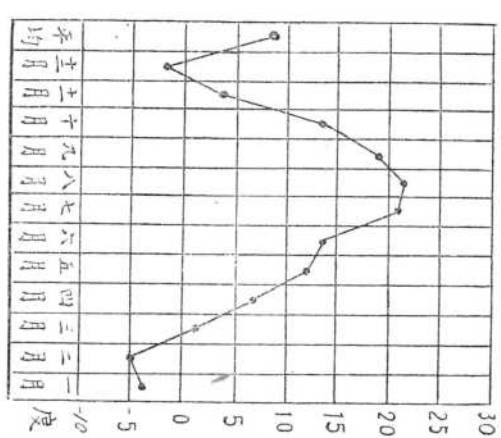
本泊は、昔から有名な港で、戸數も多く學校郵便局駐在所病院寺院等もあつて、西部の中心地をなしてゐる。

方面に比較すると暖かて、氣候の變化も少く、夏季は陸

方面よりも涼しく、七月八月の平均温度は二十一度で、最も暑い時でも三十度に昇る事はなく、又冬季は陸方面に較べると、ずつと暖かて、一月二月の平均温度は、零下四・五度で、最も寒い時でも零下十五度に降ることは殆どない。これは日本海を流れてゐる對馬海流の影響を受

けて氣候が溫和な爲である。従つてオホーツク海沿岸のやうに、冬季流氷の來る事は殆どなく、春の融雪も早く、秋の霜や雪は陸方面に較べるとずつと遅い。此のやうに氣候が溫和で

壹ヶ年温度



あるから大變暮らし易い。

島の中央に利尻山が高く聳えてゐるので、雨は割合に多く、殊に反對側の位置にある仙法志村の方とは、晴雨の關係が反對の場合が多い。霧も時々見るけれど、北見根室の海岸のやうに深くはない。風は大變強い。春から夏にかけて吹く

は殊に強く、他の地方に較べると風の吹く日も多い。

(昭和十一年)

風向圖

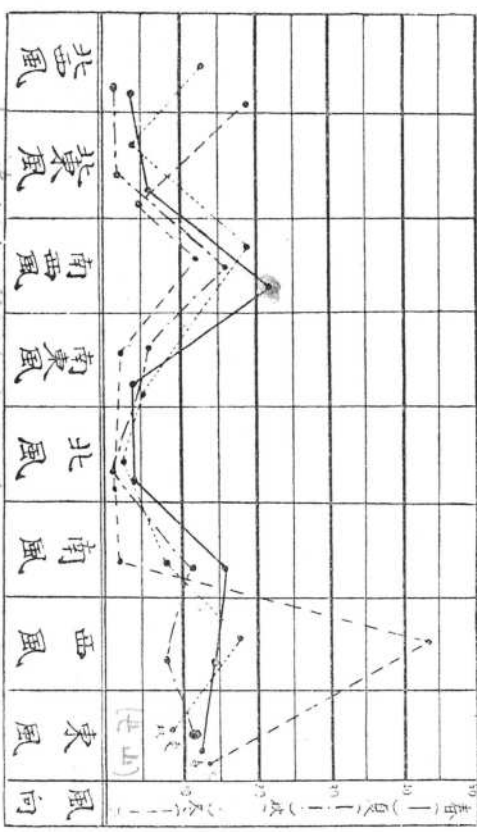
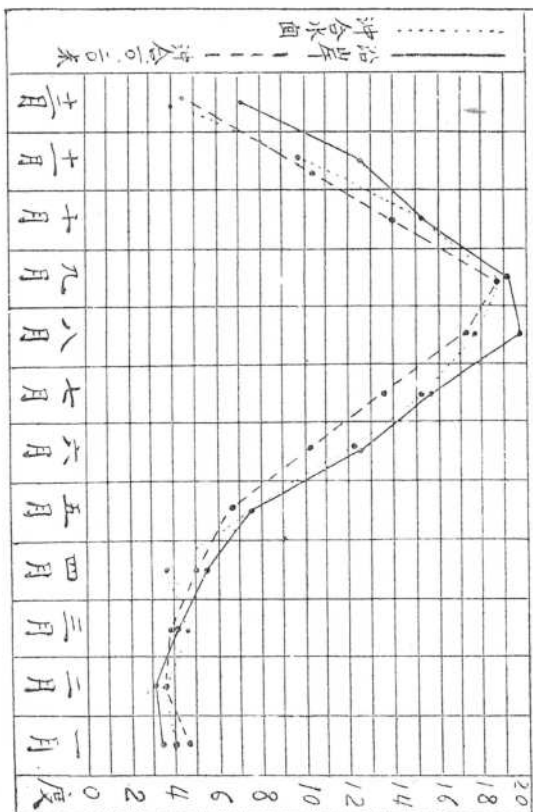


表 海 水 温 度 (昭和十年)



春から夏にかけて、東風や北東の風が強くなり、温度が急に降って寒いが、南西の風が吹く時は暖い。冬季の気温は割合に高いが、風が強いため寒さを感じずる。殊に西風や北西の風の時には寒さを感じずる事が激しい。

本村の産業及気温等に関する深い関係を持つてゐる海水温度は、六月から十月までは温度が高く十度以上

四、産 業

我が駕泊村は、昔から海産物の頗る豊富な漁村である。従つて全村戸数の六割は漁業に従事してゐる。主なる水産物は鯧昆布、蝶鯉、鱈、鰯、雲丹等で、年産額百萬元餘である。近年發動機船を使用する沖合漁業が發達して、村内所有の發動機船が約四十隻もある。

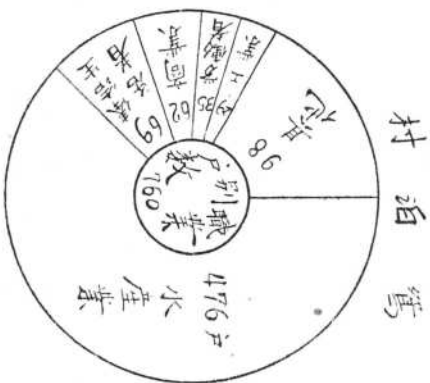
沿岸には海苔、礁昆布礁が築設され、又水産青年学校の

内容を充實して、有爲な漁民を養成すると共に、水産物の製造加工の研究發達を計りつゝあるので、將來本村の漁業は益々發達するに違ひない。

水産物の中で一番産額の多いのは、鯨と昆布である。鯨は昔から本村の最も大切な水産物で

毎年大漁が續いたのであるが、近年は不漁の年が多い。

それで昔からの建網業(鯨)業者の多くは廢めて、鯨合同漁業株式會社の經營になつて居る。今では土地の漁業家が經營する建網も多くの人が共同で歩方網を建てるやうになつた。刺網業者の數もなかく多い。昔は主に鯨粕に



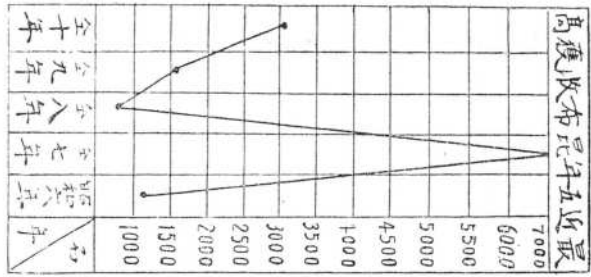
昆 (利尻昆布) 布

製造したのであるが、近年は大抵身欠鯨にする。

昆布も昔は毎年豊作であつたが、近年は一年お

きに豊凶がある。豊年の年には六千石(約三万圓)位であるが、凶作の時は二千石以内のこともある。

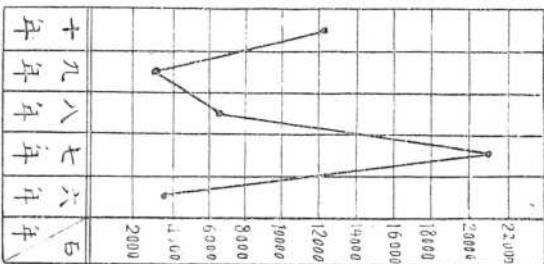
昆布は質が極めて良く、利尻昆布と言つて、古くから日本國中に知られてゐる。七月下旬から八月上旬にかけて、全村民の大部分が小舟に乗つて昆布採をするのであ



るが、何百隻の小舟が競つて漁をする有様は實に見事である。近年昆布礁を造り磯掃除を行つて増

あつたが、近年は一年お

最近五年遠鯨の獲取 (Recent Five Years Distant Whaling Catch)



共
農
業
他

最近五年の産物獲高

種類	一八二四年	一八二五年	一八二六年	一八二七年	一八二八年
鯉	2000	2000	2000	2000	2000
鱒	1000	1000	1000	1000	1000
鮭	500	500	500	500	500
鱒	500	500	500	500	500
鱒	500	500	500	500	500
其他	100	100	100	100	2500

此の外雲丹鮑海苔銀杏草若布等の産額も少なくない。又本村の漁業家の中には、漁期に稚内方面に根拠を置いて鮭漁に従事する者もある。今後水産業は益々發達するであらう。農業は餘り盛んでない特に風が強く畠の肥土を飛散するため作物の成育に適しないので、多くは自家用の蔬菜類を作る小規模の農業である。然し、アジ

鯉
鱒
鮭
鱒

鱒

殖を計ると共に、加工製造の研究が盛になつて来た。利尻昆布は主として大阪方面に多く賣り出される。鱒は機船底曳網で漁をし、生賣で東京方面に賣り出されるのであるが、近年は次第に漁獲が少なくなつた。鱒や鱒は冬期發動機船で、多くは禮文西岸の沖合から武蔵堆で漁をするが、時にはオホーツク海や樺太の沖合までも出漁する。鱒は多く素乾にするが、十二月から二月頃までは生魚で東京方面に賣り出される。鱒は凍乾にして明太魚にし、朝鮮方面に販路を求めてゐるが、近年ロール明太魚の製造も行はれるやうになつた。鱒の卵は紅葉子と言つて高價なものである。鱒は冬期沿岸で延繩で釣り、多くは酢鱒に製造する。多い年には六千樽位産出する。

工業

商業

村役場

リクタンから西の部落には、かなりの畠があつて馬鈴薯が作られてゐる。近時廣い平原の草を利用して綿羊を飼育することが大いに奨励されて來た。

工業では、利尻釀造株式會社があつて、清酒「北富士」は利尻全島に賣り出され、又味噌や醤油も製造して居る。本泊の製油工場は、鱈や鰵等の肝油を製造して居る。鐵工場は二軒あつて、種々の金物や機械類の製作修繕をして居る。近時、水産物の製造加工が行はれるやうになつた。これはやがて大いに發達するであらう。

又鴛泊には、利尻水力電氣株式會社があつて、鴛泊沓形仙法志の三ヶ村へ送電してゐる。此の電氣を起す水力は、姫沼から送水されるのと、發電所川上流の一部とを貯水池に取り入れるのである。三三〇〇ポルト四八キロ

ワットの電力で、約三千燈照明されてゐる。商業の中心は鴛泊市街で、大小の商店が軒を並べて建ち、物資は大抵汽船で小樽方面から移入される。年額は約六十万圓に上り、一戸當り八百圓位で、食料品や衣類等が主なものである。又北海道銀行の支店があつて、金融の中心をなしてゐる。

五、役所

鴛泊港は、昔から利尻に於ける交通の中心地であつたので、市街には役所が多い。

村役場は、市街の高臺に建つてゐる。昭和七年に改築

鴛泊小學校

明治初年に於ては人口も少なく、従つて教育事業も殆ど行はれなかつたが、明治十年頃利尻禮文兩郡の總代人

六、教育

此の外、稚内區裁判所鴛泊出張所があつて、利尻郡全部の登記事務を掌り、函館地方專賣局鴛泊販賣所では、利尻禮文二郡の煙草の配給をし、森林保護區員駐在所では、村内の國有林の保護取締をしてゐる。水産物検査所は、鴛泊支所では、利尻禮文兩郡の水産物の検査をし、品質の向上につき漁業家を指導してゐる。又村内の漁民の利益を保護し漁業の發展を計る漁業協同組合の事務所もある。

其 他

燈 臺

千燭光の光を放つて、利尻水道を通る船舶の安全な指針となつてゐる。
又ペシ岬の上に聳え立つ燈臺は、六等燈臺で、一万九百餘の汽船や帆船が、時々寄港するので設けられたのである。
又、カムチャツカ沿海洲北樺太方面へ航海するに於て、これは鴛泊港が昔から天然の良港として知られてゐるので、外國貿易關係を取締る函館税關管轄の税關監視署(明治二十二年)もあつた。

税關監視署

郵 便 局

關係上重要な位置を占めてゐる。
在つて、鴛泊郵便局は陸地方面と利尻島との郵便連絡の通信事務を取扱ふ郵便局は、鴛泊と本泊の兩市街とに本泊とには巡査駐在所がある。
村内の治安を圖る警察は、鴛泊に部長派出所、鴛泊に

警 察

されたもので、立派な建物である。

雄志内小
學校

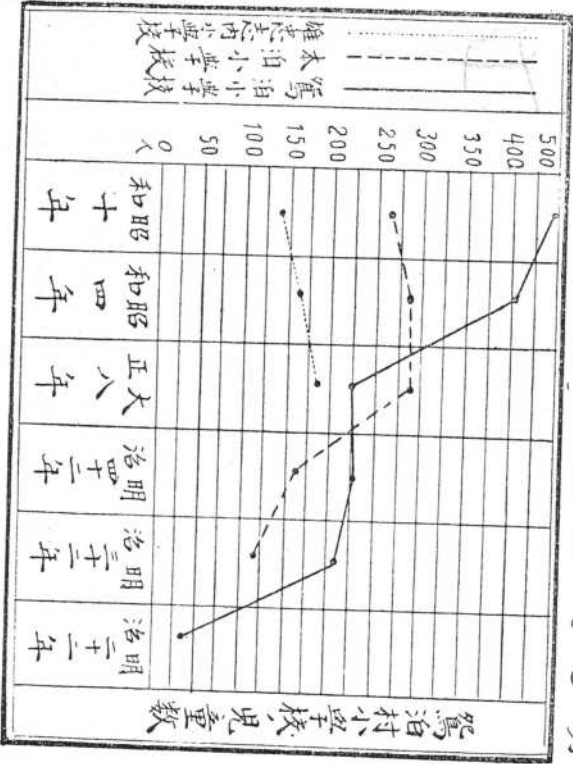
本泊小學校

六年十一月二十九日鴛泊小
雄志内校は、明治二十

として設立を認可され、明
治二十六年十月三日獨立し
て本泊尋常小學校となつた。
明治三十二年五月山火のた
め類焼したが、その年に校
舎を新築して三學級編成さ
なつた。爾來、児童數増加
と共に學級を増設して、現
在児童約二百七十名六學級
である。

本泊小學校は、明治二十三年五月利尻小學校本泊分校

鴛泊村小學校児童數



河村市藏氏が業務の餘暇に附近の児童數名を集めて讀書
算を教へた。これが本村に於ける教育の初めである。其
の後、岡田兵吉氏牧捨次郎氏等の役場書記により此の事
業が繼續せられてゐたが、漸次人口も増加し児童數も多
くなつたので、明治二十二年今の役場の近所に校舎を建
て、利尻小學校の分校として認可せられた。當時の児童
數は僅かに三十三名であつた。明治二十六年十月三日獨
立して鴛泊小學校となつた。此の年、通學児童の便を圖
り更に雄志内に分教場を設けた。これが現在の雄志志
内小學校の初めである。明治二十九年に高等科が併置さ
れ、校舎を現在の位置に移轉した。現在の児童數は約五
百で學級數も九つとなり、内外の設備も充實して、管内
でも有數の學校となつた。

我が村の鎮守の神である利尻山神社には、大山祇命大綿津見命豊受姫命の三柱の神が祀られて居る。初め文政年間に惠美須屋の支配人で源兵衛と言ふ人が本泊に社を建て、大山祇命を祀つた。これが今の奥院で、利尻郡に於ける最初の神社である。明治九年に村社に列せられ

八、社 寺

努め、本村の産業開發に盡さうとして居る。更に女子の爲に、本泊雄忠志内には冬季間の何れも裁縫を主とした日常生活に必要な教育を行つてゐる。男子の夜間部も近來大いに面目を改め、三校共に就學出席の成績が向上されて來た。

學校分校として設立されたのであるが、當時の児童數は三十名に過ぎなかつた。明治三十四年四月一日獨立の認可をせられて、雄忠志内尋常小學校となつた。現在は學級數三つで児童數約百五十名である。

實業補習學校は、明治三十八年鴛泊小學校に附設を認可せられ、夜學を主として小學校卒業後の青年を教育したが、其の後本泊雄忠志内兩校にも附設せられた。大正十五年には、何れも青年訓練所に改められ、昭和八年には、更に水産青年學校と改稱された。昭和九年度から鴛泊に從來の夜學制度の外に、晝間通年制を設け、女子の爲には實科女學校が設けられ、昭和十年青年學校女子部と改稱せられた。男子部は昭和十年加工場完成と共に、本村の重要産物である水産物の加工に關する研究指導に



寺院

神社發電所貯水池畔に、利尻山神社の御分靈を祀る祠等がある。

日清日露日獨戦争や、滿洲事變等に戦死した勇士の英靈を祀る忠魂碑は、利尻山神社の境内にある。九月十五日の招魂祭には、村民多數参拜して英靈を慰めるのである。

寺院は、眞宗二ヶ寺、日蓮宗二ヶ寺、曹洞宗淨土宗各一寺ある。

本淨寺は、淨土眞宗で大谷派である。明治十四年淨雲大信氏が、札幌の北海道教務所から御下附の開教佛を奉じて渡島し、説教所を建て、布教し、其の後西房寂圓氏が之を繼ぎ、更に明治二十年明石雪城氏が繼承するに及んで、寺運が大いに發展した。これが利尻郡で最初の寺

明治二十年五月に鴛泊に移轉の儀が認可せられた。大正九年四月大綿津見命豊受姫の二柱を合祀し、昭和四年社殿の改築落成を見た。社殿は崇嚴で、境内は高壯にして鴛泊市街を一望の裡に眺めることが出来る。全村民何れも氏神として尊崇篤く、本泊雄忠志内野東リヤウシナイの各部落に遙拜所がある。毎年七月二日には祭禮を行つてゐる。

マトントマリには北海富士神社がある。祭神は利尻山神社と同一で、明治三十四年九月に創立せられ、無格社である。又ペシ岬には嚴島神社の祠があつて、嚴島姫を祀る。文政十三年建立の烏居があり、現在は合同會社で氏神として奉祀してゐる。

此の外、村境カムイヌカに嚴島姫を祀る神威神社稻荷

鴛泊港は本泊港と共に、古くから北部北海道に於ける

八、交 通

覺道氏が、リヤウシナイに説教所を創立したが、明治三十七年現在の位置に移り、佛海山大法寺と公稱してゐる。大正八年全焼したが、昭和七年十月に現本堂が建立された。慈教寺は淨土宗で智恩院派に屬してゐる。明治三十三年察警上人大澤靈苗氏が一字を建て、説教所となし、布教したのが創りて、大正二年今の本堂を建立し、この年の十一月寺號公稱の認可を得て、靈苗山慈教寺と稱してゐる。

院である。明治二十九年寺號公稱の認可を得て、護法山本淨寺と稱したが、昭和三年焼失し、昭和十年現在の本堂が建立された。願正寺は淨土眞宗で、本派本願寺派である。明治二十年兼崎了義氏説教所を創立したが、大正三年三月に寺號公稱の認可を得て、願正寺と稱し今日に及んでゐる。妙海寺は日蓮宗で、身延山久遠寺派である。明治三十年七月中村雪堂氏の説教所設立に創り、大正十五年十二月認可を得て、蓮華山妙海寺と公稱する様になつた。本立寺も日蓮宗で、身延山久遠寺派である。明治三十年八月小堀本立氏が説教所を創立し、明治三十六年認可を得て、淨修山本立寺と稱してゐる。大法寺は禪宗（總持派）で總持派である。明治二十七年廣澤

る汽船に乗り、七八時間を要して稚内に至つたが、本航路開始以來、僅かに三時間で渡航が出来、且毎日往復するので利尻各村の人々は喜んで此の船を利用するやうになつた。此の状勢に鑑み丸一會社では、更に大型の優秀船を建造し、近く就航させることになつてゐる。

陸上には、島を一周する準地方費道があつて、春の融雪期から初冬積雪期に至るまで、數臺の自動車は運轉され、陸上交通が頗る便利である。鴛泊村内の道路は、準地方費道十六軒半、村道四十四軒半である。村民の道路愛護の精神の普及によつて、次第に改善せられて居る。郵便電信電話の通信機關も亦よく完備してゐる。特に東洋丸の就航以來郵便の便が頗る改善され、離島に住む不便を感ずることが尠くなつた。

天然の良港として知られ、兩港共に本道と樺太とを連絡する寄港地或は避難港として、和船が常に碇泊してゐた。

鴛泊港は小樽港を距たる事百三十哩稚内港より二十八哩で、利尻島交通の中心である。従來は藤山汽船會社所有の樺太丸(噸五〇〇)と、嶋谷汽船會社所有の富山丸(噸一〇〇)の二船が、小樽利尻禮文稚内を連絡する定期航海によつて、交通の便益を計りつゝあつたが、昭和十年四月から丸一水産會社所有の東洋丸が、鴛泊港を中心として稚内鴛泊香深の三港間を毎日運航するので、荷客郵便等交通の便が頗る改善されるに至つた。従來は、小樽より隔日に來航す

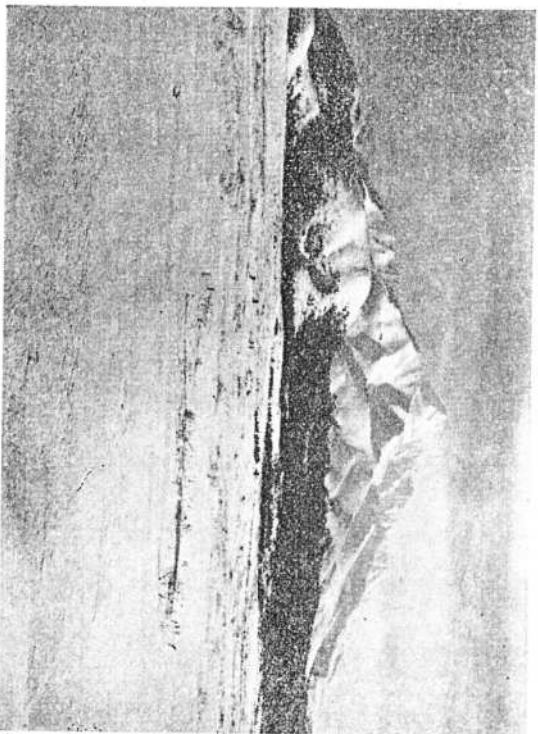
白鴛泊	三〇	三〇	三〇	三〇	二八	一〇	二三	二〇	一四	一五	一〇
小樽	三三	三三	三三	三三	二八	一〇	二三	二〇	一四	一五	一〇
天鹽	三三	三三	三三	三三	二八	一〇	二三	二〇	一四	一五	一〇
稚内	三三	三三	三三	三三	二八	一〇	二三	二〇	一四	一五	一〇
香深	三三	三三	三三	三三	二八	一〇	二三	二〇	一四	一五	一〇
船泊	三三	三三	三三	三三	二八	一〇	二三	二〇	一四	一五	一〇
仙法志	三三	三三	三三	三三	二八	一〇	二三	二〇	一四	一五	一〇
鬼脇	三三	三三	三三	三三	二八	一〇	二三	二〇	一四	一五	一〇
啓形	三三	三三	三三	三三	二八	一〇	二三	二〇	一四	一五	一〇

利尻島と禮文島を繼ぐ海底電線は、オトントマリから禮文の差閉に至り、北海道陸地との連絡線は、鬼脇村の石崎から海中に入り、稚内町の抜海に至つてゐる。

九、名 所

利尻島は禮文島と共に、全部が既に公園であつて、到る所風光に満ちてゐる。かつては北海道三景の第一に選ばれ、最近又道立公園の候補地に選定された。本島の中央に聳える利尻山は、海拔一七一八米の高峯で、山容の秀麗を以つて知られてゐる。登山口は、鴛泊鬼脇の二道あつて、鴛泊口は、利尻山神社第一鳥居側に登山口がある。これより第一水呑場ま

で約三軒、更に二軒半で巡視人の番小屋に至る。更に登ること二軒半の三角點に到れば、佐上長官の登山記念碑がある。少しく下つて第二水呑場に至り、これより約二軒で頂上に達する。ここに小祠があつて、利尻山大権現を祀つてある。眺望頗る佳く、晴天の日は、利尻禮文の兩島は脚下にあり遠く樺太北見沿岸天鹽留崩を遠望することが出来る。又第二水呑場より頂上に至

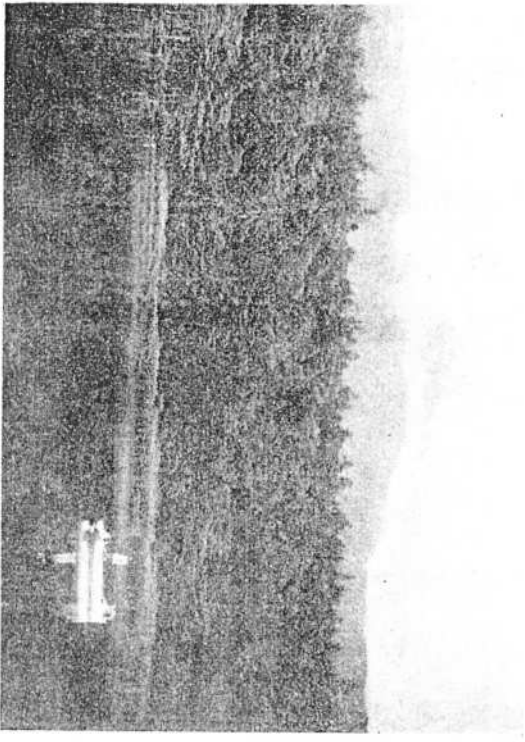


利尻山の遠望

姫沼

い。燈臺は、東端水面上七十
二米北緯四十五度五分東經
百四十度十四分の所にあり
六等燈臺で一万九千燭光の
閃白光十五秒で一閃光を放
つてゐる。明治二十五年十
二月十五日の初點で、白色
圓形高さ四米の石造建築で
ある。

姫沼は、駕泊市街を距た
る約三軒リヤウシナイ部落
本道より約五百米の國有林内にある。周圍約八百米の小

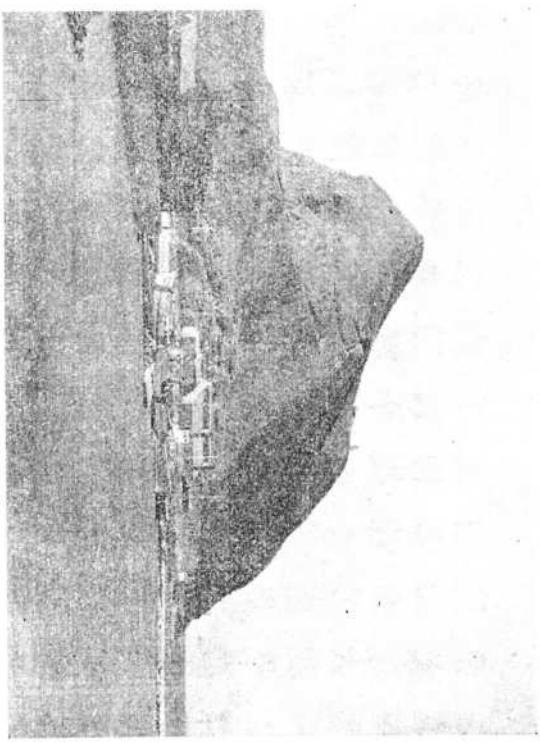


沼 姫

燈臺山

る間は、所謂御花島であつて、高山植物は一面に可憐な
花を敷き詰めて、その美を
競つてゐる。夏季七月より
九月に至るまで、登山する
もの頗る多く年々其の數を
増してゐる。

山 燈臺
の 臺
其の先端が海上に屹立して
おる。九十二・三米の頂上に
立てば、リヤウシナイ灣が
一望の中に在り、利尻富士
影を寫し、大小の船舶が往
來する等、眺望が極めて佳



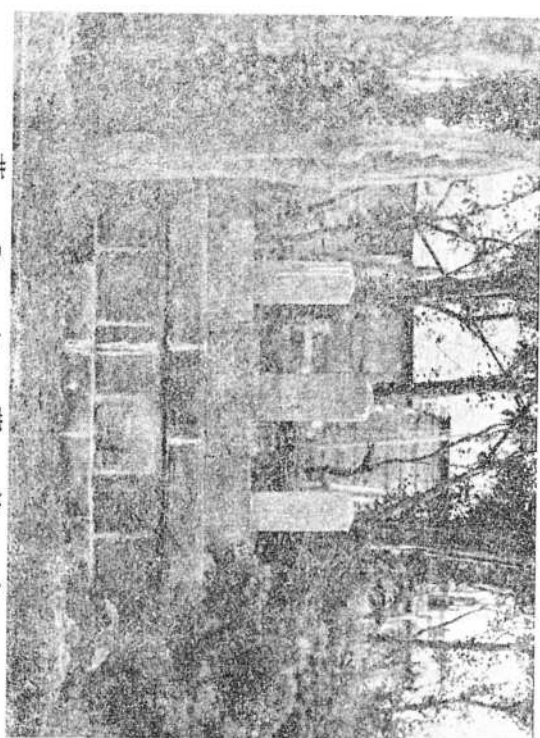
燈臺山 望遠

沼ではあるが、水清く沼上に倒富士が寫り、周囲の原始林と相和して幽邃仙境に入るの心地がする。昨の高臺に在る展望臺上に立てば、鴛泊市街より野東岬に至るまで一望の中に入る。

此の沼は、往時二ヶ所の水溜りのあつたのを、大正四年御大典記念事業として、當時の青年團長大戸一作氏等リヤウシナイ青年團員が谷間に築堤して造つたもので、千歳養殖場より姫鱒の種卵を求めて、孵化養殖をなした近年は更に鯉の養殖を行つてゐる。夏季より秋季に亘つて遊覽するものが多い。

文化四年露人が來寇して、禮文島を占領した時に、會津藩士諏訪幾之進守備隊長となつて、一隊百六十名を率ゐる本泊に上陸し對陣三ヶ月に及んだが、遂に敵は我が武

威に抗し兼ねて去つてしまつた。



當時、交通の便はなく、遠く數百里の孤島に陣して風土や食物も適せず頗る困難した。其の間戦病没した者は、五十餘名であつたがそれらの遺骨を陣屋附近に埋葬した。墓石は會津藩主松平氏が、陣没した諸士の孤忠を恤み、せめて墓石のみにても郷里の石の下に永眠させようとの慈悲心から郷里盤梯山の石で諸士の墓

會津藩士の墓

石を刻み、これを牛の背に乗せ越後新瀨に送り、それより大和船で遙々此の島に陸揚したのである。此の墓石の前に立つ時、往時の事が思ひ出され、此の君臣の温情と忠節とに思はず涙を覺えるのである。

一〇、地名

我等の郷土鴛泊の地名は、皆アイヌ語である。

これ等の意味を實際の地勢と照し合はせて見ると、眞に興味深いものがある。次に鴛泊村の地名を擧げて見よう。

- モエシルム
- チストマリ(鴛泊)
- ライシリ(利尻島)
- 高い山のある島
- 灣の端にある港(リヤカシナイ灣の端にある意)
- 出端 小岬

- サツカイシ
- リヤウシナイ
- ウエシフウナイ
- オムオマベツ
- エヌコマナイ
- ノドツトマリ
- ノツカトマリ
- オシコントマリ
- オチウシナイ
- カムイヌカ
- カムイトマリ
- トピウシナイ

大崩れのある所

越年する澤(昔も凍らない水がおり暖かな澤で雪のアイヌ人が越年したところ)
 いやな碎石のある澤

川口に塞りある川

岬の後にある川

長い岬の根本にある港

岬の上の村の港

豊産ある港

川尻の渦巻く澤

岬を越える所にある澤

神の形をなした岩のある所

神聖なる港

竹の多い澤

鴛泊村は私達の郷土である。前には無盡の寶庫と云はれる日本海の大漁田を控え、背後には北海の名峯利尻富士を戴き、天然の良港に恵まれ、交通も便利であるため年々發展して立派な村になつた。これは鴛泊村が地理上の關係が良かったばかりでなく、祖先が色々この村の爲に盡された御蔭によるのである。

鴛泊村は一年中色々な水産物が豊富に獲れ、交通も便利な上に、近年水産物の製造加工の研究に心掛ける人も多くなつたので、今後大いに産業が發達するであらう。

二、私達の覺悟

シベシ 高大な斷崖

ホロフンベ	オピヤタンナイ	大鯨の寄つた所
オトントマリ	オトントマリ	川尻が石丘なる澤
トマリ	トマリ	砂ある所の港
エベボントマリ	エベボントマリ	大港 澗
オンネワキ	オンネワキ	大境界
アシリコタン	アシリコタン	新らしい部落
モシユンツ	モシユンツ	島の多い岬
ボンモシリ	ボンモシリ	小さな島
ウエンベシ	ウエンベシ	通られぬ崖 いやな崖
フエカンツベシ	フエカンツベシ	幼児の形をした岩のある所
ノボリマナイ	ノボリマナイ	山の上を流れる河
モベシ	モベシ	小さな斷崖

155

昭和十一年七月二十日印刷
昭和十一年七月二十五日發行

鴛泊村郷土讀本

定價

北海道利尻郡鴛泊尋常高等小學校

編輯者

三

國

慶

藏

印刷所

北

日

印

刷

所

札幌市南一條西一丁目

印刷者

安

田

信

夫

發行所

北海道利尻郡鴛泊尋常高等小學校

村の人も益々立派な豊かな村にしようとなつて努力してゐる。
郷土の地理や沿革について學んだ私達は、やがては此
の郷土を背負つて立たねばならないのである。私達は父
母の志を継ぎ心を合はせて此の郷土を愛し豊かな住みよ
い村を作る様に努めねばならない。
これが日本國民として、皇室の御恩に報い奉り、又村
民としては開拓に苦心された祖先に報いる道である。